

土曜 ライフ・楽しむ

学生寮の半年 短くも濃い青春

わたし色

生活情報誌「悠悠と。」

編集長・真鍋康利



北大の学生寮と聞くと、多くの方は「恵迪寮」を思い浮かべます。寮歌「都ぞ弥生」や真冬の「ジャンプ大会」は有名で、バンカラ気質あふれる様々な武勇伝が世間に迷惑をかけたかもしれませんね。

似た名ですが、水産学部のある函館にかつて「啓徳寮」という寮がありました。手元にある「啓徳寮閉寮記念誌」から「啓徳寮閉寮記念誌」をみると、1952年に学生寮として開寮されたが、すでに相当古い建物で前身も不明とのこと。

小さな建物で、1期生23人から最後の私たち8人まで、総数285人の名簿が記念誌末尾に載っています。名前が漏れた学生もいたらしく、300人前後が暮らしたようです。

この少人数のユニークな自治寮は老朽化、寮生数の減少、借地であることなどで以前から廃寮が取りざたされ、大学側と何度も激論が交わされた末、1975年3月末の閉寮が決定。74年9月「閉寮記念祭」が開催されました。

実は私はこの記念祭には参加していません。他の学部は3年の4月に教養から移行しますが、水産だけは2年秋に函館に移ります。その際最後の寮長である友人から、「半年しか住めないが寮にこないか」と誘われ、仲間と一緒に入寮しましたが、いわゆるオ

マケの寮生。それでも密度の高い寮生活を堪能しました。

近所の方からお化け屋敷と呼ばれる外観。足の踏み場もない床や落書きだらけの壁。隙間と呼ぶのに躊躇する大隙間。明け方枕元に雪が積もっていたこともあり。暖房は薪ストーブで、雪の中の薪割りや薪運びは大変つらく、火付きの悪いこと甚だしい。

夕刻、私たちが帰るころ起き出す先輩は、この時間からキャバレーへアルバイトに行くらしい。風呂は修理が多額なため使用不可となり、近所の銭湯の回数券をもらったものです。このあたりもオマケ寮生らしいところです。

誰かが実習航海へ出る、帰ってきた、退寮した、再試験に受かったなど何かにつけて宴会です。サンマが豊漁と聞けばそれを祝って飲む。さすが水産学部、柳刃包丁を持つ者もいて、山ほどの酒と肴はすごい量のサンマの刺し身だけというぜいたくな時間を過ごし、グダグダになるまで飲み倒したものです。

これも青春というやつでしょう。か、今振り返ると楽しかった思い出ばかり浮かび、つらいことも良い思い出になっています。

今学生諸君は学業をはじめ、アルバイトも減って不自由な暮らしを強いられていると思います。しかし将来必ず良い思い出としてよみがえることもあるはず。くじけずに頑張ってください。